

田中優子 江戸文化研究 元法政大学総長
「江戸問答」(1863 松岡正剛との対談) 「日本問答」

「面影」「浮世」「サムライ」「いき」から日本の自画像を改めて問い直し、江戸の社会文化から今に響きうる問いを立て、誇りたい日本・変えたい日本・語り継ぎたい日本を明らかにしている。

そのほか、私の貧しい読書でも、イスラーム世界の優れた研究者である**酒井啓子**(「イラクとアメリカ」「イラク戦争と占領」)などとの揚げたい研究者は多いが、又の機会にしたい。

岸 恵子

今まで、すべて女性の研究者について述べてきたが、一人だけ別の世界を生きている人を扱いたい。それは極めて優れた自伝(岸恵子自伝 卵を割らなければ、オムレツは食べられない 岩波書店)で、心を強く打たれた岸恵子(女優・文筆家・国際ジャーナリスト 1932生・86歳)である。

1952~1954年のNHKラジオドラマ「君の名は」とその映画化はあまりにも有名である。

「岸恵子自伝」「わりなき恋」「愛のかたち」「孤独と言うみちづれ」「私の人生アラカルト」「私のパリ 私のフランス」「パリの空はあかね雲」「ベラルーシのリング」「歩いていく2人」(吉永小百合との共著)

映画出演 「我が家は楽しい」「君の名は」「亡命記」「風は知らない」「忘れ得ぬ暮情」(イヴ・シアンピ監督)
「壁あつき部屋」「雪国」「風花」「おとうと」「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」「約束」「男はつらいよ・私の寅さん」「悪魔の手鞠歌」「ささめ雪」「かあちゃん」「たそがれ清兵衛」

国際ジャーナリストとしても活躍し、困難なアフリカ、イスラエル、パレスチナ、そして国連の親善大使としてベトナムをも訪問した。自分で語っているが、敗北を重ねても「めげない人間」である。

俳優では、**吉永小百合**が原水爆禁止を強く主張する詩の朗読を続けている。幡多ゼミの映画製作にもボランティアで協力した。

憲法擁護、平和を目指す闘いの先頭に立っている、9条の会呼びかけ人の**澤地久枝**(作家)は戦争による女性の悲劇を次々と発掘してきた。作家・**高村薫**は世界平和アピール7人委員会のメンバーとして多くの発言を続けている。憲法学者**青井美帆**(学習院大学)は「国家安全保障法批判」「憲法を守るのは誰か」など多くの著作がある。

経済学では、**浜矩子**(同志社大学 専攻はマクロ経済学・国際経済)の「浜矩子 新しい経済学」

闘う二人のジャーナリスト

堤 未果「1% vs 99%」の構図が広がるなか、アメリカの驚くべき実態を明らかにし、「世界中の『99%』たちへ愛をこめて」贈った「ルポ 貧困大国アメリカ」「ルポ 貧困大国アメリカII」「社会の真実のみつけかた」「政府は必ず嘘をつく」など

望月衣塑子 1975生 一番リベラルな新聞「東京新聞」の記者

「記者会見で官僚らに食い下がる反骨記者」と知っている人も多い。映画「新聞記者」にも描かれマスメディアと権力の癒着を国民に知らしめてきた。

自民党と医療業界の癒着を暴くなどで2017「平和・共同ジャーナリスト基金奨励賞」 森友学園・加計学園問題で、菅官房長官(当時)を記者会見で追及、学術会議問題、スリランカ人死亡の入国管理問題にも鋭いメスを入れる。

「武器輸出と日本企業」「なぜ、日本のジャーナリストは崩壊したのか」など

著書「報道現場」は真実を語り続ける彼女の最新の「取材日記」でメディアの一員としての内部告発書で必読の一冊。

6面右上に続く



仁淀川河口大橋

II 震災の教訓

“現代のリスク”とどう向き合うか

「ユーロ消滅? ドイツ化するヨーロッパへの警告」

III 天皇と天皇制

- ① 天皇の気持ちをなぞる読書体験
- ② 『昭和天皇の戦争「昭和天皇実録」に遺されたこと・消されたこと』
- ③ 時代ごとの特徴を簡潔に学ぶ 「皇位継承 歴史を振り返り変化を見定める」
- ④ 皇室活動のあるべき姿を考えるヒントに
- ⑤ 『皇室財産の政治史 明治20年代の御料地「処分」と宮中・府中』
- ⑥ 日本の屈折姿勢 背景に列強への警戒心
「朝鮮王公族——帝国日本の準皇族」

IV 戦争の記憶

- ① 「歴史の宝石」を記憶するために(注 憲法を「歴史の宝石」は井上ひさし)
- ② 『初日への手紙——「東京裁判3部作」のできるまで』
- ③ 「個人として尊重される」か、どうかを問い掛ける
『なぜ戦争は伝わりやすく平和は伝わりにくいのか ピース・コミュニケーションという試み』
- ④ 占領がもたらす容赦ない「普遍的苦しみ」
- ⑤ 古都の占領 生活史からみる京都 1945~1952
- ⑥ 秋丸機関をめぐる神話にメス
経済学者たちの日米開戦 秋丸機関「幻の報告書」の謎を解く

V 世界の中の日本

- ① 若者と国家の双方にいかん生きるか指南する
- ② 「本当の戦争の話をしよう 世界の『対立』を仕切る」
- ③ 停戦合意が破られた戦場ではなにか起きていたか
- ④ 「告白 あるPKO隊員の死・23年目の真実」

歴史に学ぶ・・・青鞥創刊110周年

今年2021年は、戦前から戦後にかけて女性解放運動、平和運動の先頭に立ち、走り続けた**平塚らいち**嬢没後50年・女性月刊誌「青鞥」創刊110周年である。

「元始、女性は太陽であった」に始まる創刊の辞は有名である。女性の解放を訴え、同時に子どもの命を守るためには女性の権利が不可欠として相互扶助の必要性を説き、女性の参政権を求めた。「若いときは自己実現による変革が目的であったが、晩年にはその目的が社会の変革に広がった」と孫の奥村直史は語っている。時代を超えて人間の尊厳に果敢に向かってきたらいち嬢の志は現代にも生きている。

おわりに

この文章の中心は加藤陽子の「この国のかたちを見つめ直す」で、この本の目録を紹介したが、扱っているテーマの広さ・深さ・鋭さには敬意を表さずにはいられない。私の問題意識と重なっているが本当に勉強させられ、学ぶ意欲をかきたてられる素晴らしい本である。ぜひ一読をと呼びかけたい。

「おわりに」で加藤さんはこう述べている。先の大戦は、自国のみを利する閉鎖的な秩序を東アジアに敷くことで、1930年代の経済危機と軍事危機を克服しようとした日本の社会秩序・憲法がリベラル・デモクラシーの国々に打倒されたことを意味する。ぎりぎりの最終盤で日本は、憲法を書き換えることを選択し、戦争は終結した。だが今、国家と国民が交わした戦後の社会契約の賞味期限が来てしまったのではないかと不安になる。自由のもたらす恵沢を確保し、国民からの厳粛な信託を受けた政治の成果としての福利を享受させ得る国家は見失われた。

国家の再生が必要な時には、人は歴史に学ぶが、ウソについてはならない。歴史の真実は、人間の行動の記録として残された事実だけで成り立っているのではなく、「言葉に現れた知性の営みの中にもある」と先哲は教えてくれている。真実の歴史を「言葉」から探ること、本書はこれを目指した。」

左上に続く